

外来内視鏡センター看護師 萬田 吏さん
手術室看護師 高橋 聖和さん

男性ができない出産は女性の財産 基本的に仕事で男女差を意識しない



右から萬田さん、高橋さん

I M Sグループ医療法人社団明生会イムス札幌消化器中央総合病院（丹野誠志院長・岡本弘子看護部長、183床）は、今年4月、琴似ロイヤル病院から名称変更し、消化器を中心とした急性期病院としての機能を前面に打ち出し、新たなスタートを切りました。

外来内視鏡センター看護師の萬田吏さんと手術室看護師の高橋聖和さんは、そうした同病院を支える中堅看護スタッフとして、それぞれの領域での看護の質向上に励んでいます。

萬田さんは、新卒で旧琴似ロイヤル病院に入職。その後、病棟勤務を中心に、看護師としての力量を高めてきました。一方、高橋さんは、これまで一般病棟をはじめ、透析室、精神科など経験。中でも手術室が一番長く、現在は、「手術看護のおもしろさ」を感じながら日々研鑽しています。

同病院初の男性看護師である萬田さんは、「いい意味で男性扱いされませんでしたので、看護は女性の職場」という先入観を持たずにすんなりと入り込みました」と話します。また、医療指示の際には医師と混同する患者もいるそうです。そうした時は、あえて訂正せずにそのまま行うことで、円滑なコミュニケーションが図れることもあると言います。

「基本的に、仕事では男性、女性を意識しません」ときっぱり話す高橋さんは、男性患者から、女性の看護師に言いづらい内容の相談にのることが多々あるそうです。また、高校時代にプロのバスケットボール選手を目指したこともあったという190cm近い身長をかめながら、時には、高齢者たちの「良きお孫さん役」に徹することもあるそうです。

逆に男性として苦労を感じる点として萬田さんは、「強いて言えば、出産など、男性ではできない人生経験を女性はされることで、男性よりも患者さんの心に寄り添える部分があるのかなと感じますね。女性のそうした経験は貴重な財産ですね」と話します。

高橋さんは、女性患者の羞恥心から看護を外されることがあるそうですが、「そうした場合、他の女性看護師の方に負担をかけることになりますので、難しいなと感じますね」と、割り切れない思いを話してくれました。

毎日、「患者さんのため」に自らを磨く二人ですが、「患者さんの負担をさらにさらに軽減し、誰からも頼られる看護師になりたい」（萬田さん）、「術中に話すことができない患者さんの代弁者として、手術看護を深め、信頼される看護師を目指したい。加えて教育にも力をいれたい」（高橋さん）と、忙しい中でも、それぞれしっかりと先を見据えていました。